

【史料一】寛政二年 川野辺寛「高崎志」

此町ハ昔ヨリ、馱馬ニアラズ、又客舎モナケレ共、敷地モ広く大ナル家造リモアリシ故、往来ノ諸大名モ、休泊セラレシトナリ、因テ本陣トハ呼シト也、其後今ノ年寄福田某カ先祖、世々本陣ヲツトメ来リシヲ、数度火災ニ遭テ家作モ漸ク少ク、且城主ヨリモ、倉賀野ニ本陣アレバ事足ルベシトテ、終ニ城下ニ本陣ヲ置レズ、サレドモ今猶玄閑座敷ヲ構へ、諸侯、城下ヲ経過セラル、時ハ、城主ノ使者等此ニ出向ヒ応対スル也、故ニ土人ハ本陣ト呼ブ。

〔高崎市史〕

【史料二】高崎藩郡方方式

(前略)

「四十一」御老中様方節取計之事

一御通行前、道橋手入・掃除等入念申付、

前日ニ相成、御用掛御側人・町奉行・郡奉行御道筋見分致候事

但 百姓家見苦敷候得共、自分ニ手入成兼候者ハ御手当被下、且垣

根等も見苦敷無之様ニ為直候事

一両町口外江町奉行・郡奉行之内老人宛、麻上下ニ而罷出候事

但 役名名前認候手札懐中、御通之節持鍵伏、且夜に入候ハ、御紋

付台桃灯式張ツ、出候事

一高崎倉賀野町内者、御先拵対御合印羽織袴小頭老人・町同心式人宛之事

一野間対之御合印羽織股引米見式人宛御先拵之事

但 御先乗之先見合拵可申候、夜中ニ候ハ、桃灯為持可申候

右御先拵之者、他所往来之者片付罷在候様声懸ケ、又ハ笠ぬかせ、馬

上之者下り候様可申付候事

一両御領分境江御代官老人宛手付・米見老人召連候事

但 御代官羽織立付、鍵為持、米見御合印羽織之事

一野間海道横道有之候所江、村役人老人・百姓老人宛差出候事+

〔新編高崎市史 資料編5近世1〕

【史料三】(寛政年間カ)「高崎藩役職誓詞前書案文」

御目附

起請文前書

一今度御目付就被 仰付候、 御公儀御法度弥堅相守重 御上御為

第一奉存、御後闇儀不仕、御奉公入精油断仕間鋪候事

一御隱密之儀、毛頭他言仕間鋪候、惣而 御前向之儀一円沙汰仕間敷

候事

御目付被 仰付候上ハ、誰人ニよらず中悪敷輩たりといふ共、無量肩

偏頗有体可致言上候事

御定違背之族、及心之候程見出し聞出候様ニ随分心を付可申候、勿論

見通し聞のかし不仕、聊以用捨之儀致間鋪候、跡々被 仰出候御定

之趣堅相守、且又自今以後被 仰出候御定違仕間敷候事

一御役義之權威を以、諸傍輩対私之奢仕間鋪候、尤非分申懸間鋪事

一諸事不行儀成族於有之ハ、其人江申断若於無承引者可致言上候、但事

ニ寄御家老迄可申達候、万一御家老之儀たりといふ共申断、其上言上

可仕事

一万事相談之時心底不残申出し、多分ニ付相極メ可申候、相極候儀を陰

ニ而何角取沙汰仕間鋪候事

一奉対 御為同役之面々中悪敷仕間鋪候事

附 悪心を以申合一味仕間鋪候事

右之条々雖為一事於致違犯者

可罷蒙者也仍起請文如件

嘉永五壬子年三月 宮坂金次郎血判（花押）

【史料四】『公私見聞録』

二十 嘉永五壬子年三月十六日日記之内

一 御足輕大嶋寛藏帶刀・御中間宮坂金次節義、不埒之義有之承

之御暇被 仰出候間、兩御目付へ申達ス、但御達書渡ス

一起請文牛王紙へ表御用部屋書役ニ為相認候、尤前文之義者一

体当人相認候事ニ候得共、彼是不都合之義も可有之旨、矢張

右書役ニ為相認候誓詞前文等左之通

但書判之義朱張当人へ為相認申候

小ナオシ

一 私儀此度永々御暇被下置候上者

御家之御作法被 仰付候品々不依

何事聊他へ洩申間敷候事

一 御家之御合印所持之分不殘

差上申候向後

御家之御合印相用申間敷候

事

右之条々於致違背者

―キシヤウツギ

梵天帝釈四大天王総而日本

国中六十余州大小神祇殊伊

豆箱根両所権現三嶋大明神

八幡大菩薩天満大自在天

―牛王紙

神部頓春属神罰冥罰各

可罷蒙者也仍起請文如件

嘉永五壬子年三月 宮坂金次郎血判（花押）

山岡文右衛門殿

堤金之亟殿

伊谷隼太殿

櫛嶋六右衛門殿

（中略）

一 宮坂金次郎義、月番伊谷隼太宅へ呼出し御徒士目付櫛嶋六右

衛門・御足輕目付池田金平立会之上、御達之趣隼太方申渡候

上、御印物等所持有之候ハ、差出可申旨申渡候処、一向所持

不致旨申出候而誓詞申付候旨申渡候節、表御用部屋書役若林

幸之助前文方起請文迄■上候上、当人へ書判為相認血判為致

其節御足輕目付右誓詞台之俣御徒士目付へ差出シ、夫方隼太

方へ差出候間をけし一覽相濟候頃一同引取候、座席其外左二

荒増記置候

一 右申渡相濟兩御目付添下御門方送り差出申候、但右御門之

義此節御都合ニ而御出入御門相成■候得共、御上屋敷ニ而右

様之類裏御門方差出候ニ付、右ニ準シ取斗候

【絵挿入】セイシダ井 スズリバコ セイシ ハンシ ハリ

（後略）

（個人蔵）

【史料五】『公私見聞録』

安政七庚申年二月廿日

一左之御切紙到来ニ付、御受書差出シ候左之通

堤金之丞殿 大河内友左衛門

浅井多門

差物

御免之御書付可相渡候間、明廿一日四ツ時麻上下着用可被罷出候、以上

(中略)

廿二日

一松本文七宅へ相越差物絵形等都而宜相頼度段相応相謁候、尤

出シ并笠等決迄之所相用候旨相咄置候

一頂戴御書付左之通

(図)

使番

差物入形四半にして紺裳濃にすへし、白地に三角の印許之色ハ

思々に可附黒紺花色の三品を以附事を不許出し可出事

但 四半の大サ幅式尺長サ式尺四寸三角の大サ定之通

安政七庚申年二月

堤金之丞とのへ

廿七日

一左之通絵形扣とも二枚出来之旨ニ而松本文七悻順之助ヲ以差
越具候間一同差物

(個人蔵)

【史料六】「柴田日記」

元治二丑二月廿七日、羽鳥氏同伴にて下仁田へ戦ヒの場所ヲ見物ニ参リ申候、但し石井弥次右衛門宅にて三夜程泊リ申候、同廿八日ニ合戦場の跡ヲ見ニ行申候、但し下仁田方十丁斗り西北にて小坂村ト申、名主治兵衛前通り高崎様壱番て陣所ニ御座候、但し名主治兵衛宅土蔵ニ数ヶ所鉄砲の跡有之候、誠ニ珍ら敷事ニ候、是方西ニ小坂村地内ニ安道寺ト申所ニ高崎様式番て陣所是有候、壱番て陣所前にて大戦ヒ、猶又安道寺にてハコトの外大戦ヒニ御座候、戦ヒ中七・八軒此所焼ル、是方ナメト申所橋向西ノ方ニは公義ノ御役人衆カリウトニ鉄砲ウタセ居り候、但し橋ヲはつし居り候、浪士ハ此方川上ヲ通り通行仕候由ニ御座候、但し此所見物ニ参り候、廿八日八ツ半頃羽鳥氏同伴に御座候、壱番て式番て戦ヒ場陣所辺桑ノ木ニ鉄砲の跡数ヶ所有之候

(高崎市教育委員会蔵)